

# 言語理論の「常識」と学校英文法： いわゆる“主語繰り上げ”について

田中 宏明  
(人文学部国際社会学科)

## Subject Raising : Generative Syntax and its Pedagogical Implications for English Teaching

Hiroaki TANAKA  
(Department of English Linguistics, Faculty of Humanities)

### Abstract

Noam Chomsky's epoch-making work called *Syntactic Structures* was published in 1957, and this heralded a lot of innovative developments in the linguistic theory of the past four decades. In this paper, we examine how the fundamental and conspicuous findings of recent theoretical linguistics, especially those of generative grammar, can contribute to the education of English in Japan. We will be concerned with the so-called "subject-to-subject raising" phenomena, and investigate their wide range of pedagogical implications vis-à-vis the famous sentence-rewriting quizzes containing *seem* of English grammar in Japan.

**Key Words** : 学校英文法、動詞 *seem*、主語繰り上げ (Subject Raising)、移動現象

### 目次 (Contents)

1. 序論 — 日本の学校英語教育の目指すべき方向性とは
  - 1.1 今日の日本の学校英語教育
  - 1.2. (英) 文法バッシング
  - 1.3. 「文法」の復権
2. 生成文法理論 (GB理論)
  - 2.1. 生成文法理論とは
  - 2.2. 生成文法の理論的変遷・概要
  - 2.3. 英語教育との関連において
3. “主語繰り上げ” 構文をめぐって
  - 3.1. “主語繰り上げ” 構文とは
  - 3.2. コントロール動詞との相違
  - 3.3. 実際の派生のステップの説明

### 3.4. 教室でのハンドアウト

## 4. 結 語

### 注 (Notes)

### 参考文献 (References)

## 1. 序論 — 日本の学校英語教育の目指すべき方向性とは

### 1.1. 今日の日本の学校英語教育

今日の日本の学校英語教育においては、「コミュニケーション」や「ネイティブ・スピーカー」や「英会話」といった、どことはなく華やかなびびきのある言葉がさながらお経の文句のように唱えられ、残念ながら「英文法」はますます軽んじられる傾向にあると言える。ところが第二言語習得 (2nd Language Learning) においては、第一言語獲得 (1st Language Acquisition) の場合とは異なり、実はこの「文法」こそが学習上の最大の武器なのである。つまり学習者は文法を抛り所にしながら、その当該言語の基本語彙を増やしていくことで、第二言語を習得して行くと言い切っても過言ではない。建築作業にたとえるなら、文法は基礎工事の「土台」、語彙力増強は「柱」に相当すると言えよう。今の日本の外国語教育におけるこの「コミュニケーション重視」という国是は、これからの日本の英語教育のとるべき方向性として決して間違っているとは思わないが、二十歳 (はたち) にもなろうとする大学の学生諸氏が、外国人教師を前にしてただ口をピークパーチク縦横に動かしている程度のもものでは、残念ながら真の英語力の向上は望むべくもない。言葉・言語の勉強というのは「科学」なのであり、それは依然としてミステリーに満ち溢れていて、解明されていない事の方がむしろ多いくらいである。わからない点が多いからこそ勉強する価値もまたあると言えるし、従って理屈や理論を考えない外国語学習というのはただただナンセンスとしか言いようがない。

またさらに言えば、現在爆発的に世界中に広がりつつある電子メール (e-mail) という通信手段が、筆談の重要性を飛躍的に増大させたことは間違いないことである。つまり、文字を読み書くことにより相手の主張を理解し自分の気持ちを伝えるという筆談 — つまり文字を介しての「コミュニケーション」 — が今後ますます重要になって来るであろう事は、もはや疑問の余地すらないであろう。論者は1997年から1998年にかけて、アメリカのボストン市郊外にあるハーバード大学言語学科の客員研究員として研究生を送った経験があるが、大学の構成員は学生も含めてすべて電子メールのアカウントを持ち、大学及び言語学科に関する研究上・運営上の事はたいていが電子メールで事足りてしまった事は十分記憶に新しい。なお1999年現在では、日本の大学組織及び学生間にも電子メールは急速に浸透しつつあると思われるが、やはりアメリカに比べると、この点では日本は依然極めて後進的状况にあると言わざるをえない。<sup>1</sup>

### 1.2. (英) 文法バッシング

ところが「文法」という観点から見ると、英語と日本語は系統的な関連性がなく、また言語構造においても大きく異なっていると一般的に言われている。従って初めて英語を学ぶ日本人にとつ

て、英語の文法は極めて取っ付きにくく、無味乾燥したものとして受け取られがちである。今日の日本の学校英語教育に対する「(英)文法バッシング」の大合唱の如実に示すのは、日本人の異常なまでの「文法アレルギー」というのが単に若い受験世代に特有のものにとどまらず、それなりの学歴・職歴を有する知識層の間でも「文法知識は十分あるのに、日本人は英語がしゃべれない！」式の妄想にいかにも病的なまでに毒されているかということである。大学受験科目から「(受験)英語」をなくしてしまったらどうかという、最近とみによく聞かれる暴論がこの事を端的に表しているといえよう。これはまことに悲惨かつ遺憾な現実である。はばかりことなくここで真実を語ろう。ほんとうは、「日本人は全体的に(英)文法知識が全く不十分で、それが故に余計に英語がしゃべれない」というのが正解である。ただ旧来の日本の英語教育の現場における英語教育の方法論の実状というのは、品詞論や文型パターンの分類に始終するなど「8品詞・5文型に始まって8品詞・5文型に終わる」程度のものであったことは残念ながら否定できない。

### 1.3. 「文法」の復権

本論の目指す(英)文法とは、最新の言語理論、特に生成文法理論から得られた知見を徹底的に活用し、さらに学習上も十分に有益なものである。例えば日本語と英語の構造を少し比較<sup>2</sup>してみるだけで、言語理論及び言語教育の観点から実に面白い言語事実が浮かび上がってくるのである。では翻って考えてみると、日英語は全体的に見ると言語構造のどのような点において、どのように異なっているのだろうか。また両言語の間に共通性というのではないのだろうか。この両言語間の共通性というものは他の諸言語——例えばドイツ語、フランス語、韓国語、中国語など地球上のありとあらゆる人間言語(human language)——にも当てはまるような普遍的特質なのであるだろうか？このような両言語の比較・対照から得られた相違点・共通性がより具体的に明らかになればなるほど、学校英語教育を発展させていくような理論的知見が見つかって行くに違いないと思われる。本論では教室の片隅に追いやられてしまったこの言語構造の研究、すなわち文法というものに今一度大きな光を当て、外国語学習を考えてみる事にする。ここでいう文法とは特に1950年代からチョムスキーによって開拓された生成変形文法及びGB理論<sup>3</sup>を指し、その真骨頂をいわゆる学校英文法に取り込むことにより、学校英文法を活力のあるものにしていくことを目指している。

## 2. 生成文法理論 (GB 理論)

### 2.1. 生成文法理論とは

チョムスキーを中心とした理論言語学(Theoretical Linguistics, Formal Linguistics)、つまり生成文法(Generative Grammar)の発掘した幾多の言語事実・言語現象を少しでも英語教育の現場に反映させたいというのが論者のかねてからの切実な思いであるが、残念ながら現状の英語教育の方法論は悲惨の一言に尽きている。なぜ生成文法が特別なのかという問いかけもあるかと思うが、生成文法はやはり他の言語理論に比べて議論の仕方が傑出して精緻・精巧で、一度生成文法に足を踏み入れた者は他の言語理論に移ろうとしてもその稚拙さに絶望するだけであろう。チョムスキーが打ち出した言語理論の最も特質すべきアイデアは、統語現象を説明するにあたって目に見えない要素、例えば格(Case)、主題役割(theta-role)、素性(feature)等の要素に決定的に重要な役割りを担わせた点であろう。これが生成変形文法・GB理論の主旨であり一番画期的なところである。

## 2.2. 生成文法の理論的変遷・概要

かつて変形(生成)文法と呼ばれたチョムスキーの形式言語理論も、1957年にその最初の理論的枠組みが『統語構造』<sup>4</sup>によって示されて以来40年以上を閲した。この間大きく5種類<sup>5</sup>の異なる名称で呼ばれるように、その理論体系を、ある時は微妙に、ある時は急激に変容させてきた。理論の進展とともに、チョムスキーが真に目指すものは、例えば英語なら英文法、日本語なら日本語文法というような個別言語の言語現象・文法現象の説明ではなく、すべての自然言語に共通する核(core)となる特質、つまり普遍文法(Universal Grammar)を発見することであることが徐々に認識され、多くの英語偏重の我が国の言語研究者がチョムスキー離れを起こした。しかし、もともとチョムスキーの目標は普遍文法の発見であり、英語はチョムスキー自身が英語の母語話者であるために、普遍文法発見のための最も信頼できる言語資料のひとつとして用いられたに過ぎなかったのである。<sup>6</sup>

チョムスキー理論が大方5回もの理論修正を経て来たことは、単なる理論修正、特に個別の言語現象の説明のための理論修正と解釈されてはならない。チョムスキー理論の理論修正は、すべて普遍文法の特長として妥当なものであるかどうかという見地から行われている。例えば、個別言語の構造をとらえる理論として句構造規則(phrase structure rule)は非常に有用なものではあるが、だからといって句構造規則の存在を単に受け入れるだけでは、句構造規則そのものが言語により異なるのはなぜなのかという疑問には最初から目を閉ざしていることになり、単に個別文法の研究に終わってしまう。普遍文法研究の立場から言えば、個別言語間における句構造規則の相違がなぜ存在するのか、という問いの方が、非常に重要な意味を持つのである。

最新のチョムスキー理論の枠組みは「ミニマリスト・プログラム」<sup>7</sup>と呼ばれている。この研究方法(アプローチ)は、自然言語の文法原理は必要最小限のものでなければならない、というものである。このことは、従来提案されてきたいろいろな理論的装置が不必要であったり、別の観点からの見直しが必要であることを指摘する役割を持っている。

## 2.3. 英語教育との関連において

以上で概観してきたように言語学者チョムスキーが、「生成変形文法」の礎を作ってから既に40年を閲し、その理論そのものは標準理論からGB理論を経てミニマリスト・プログラムに至る今日まで大きな変遷を遂げてきたものの、数々の隠れた言語事実を発掘しそれらを顕在的に示して来たという点において、これほど強力で広範囲な影響力を持つ言語理論は歴史上どこにも存在しなかったと言えよう。

しかしながら翻って考えてみる時、この生成変形文法の掘り起こして来た莫大な言語財産を、たとえどのような形であれ、従来の学校英語教育が英語教育の現場に反映することができたのかどうかを問うてみる時、その答えは、実に残念な事ながら、はなはだ否定的なものとならざるをえない。従来の文法教育は品詞論や文型の区分といった言語の表層の記述にだけ心を奪われて、言語の深層なり背景にまで考察をめぐらすということがなかった。従って文法に対する洞察力が養われなかった。

こうした現状に鑑み、本論ではその1つの事例研究として seem を中心とする“主語繰り上げ”構文を研究してみる事とする。英語には“繰り上げ”という移動現象があるという事実を学校英文法でも教え、学生の英語・英文法についての理論的直感を積極的に養って行くべきである、というのが本稿の論旨である。

### 3. “主語繰り上げ” 構文をめぐる

#### 3.1. “主語繰り上げ” 構文とは

大学入試対策も含めて学校英文法の重点事項の一つになっているものに、動詞 *seem* に関する下記の4つの書き換え問題がある。

- (1) a. It seems that John is honest. → John seems to be honest.  
 b. It seems that John was honest. → John seems to have been honest.  
 c. It seemed that John was honest. → John seemed to be honest.  
 d. It seemed that John had been honest. → John seemed to have been honest.

これを逆方向から書き直せば以下の通りである。<sup>8</sup>

- (2) a. John seems to be honest. → It seems that John is honest.  
 b. John seems to have been honest. → It seems that John was honest.  
 c. John seemed to be honest. → It seemed that John was honest.  
 d. John seemed to have been honest. → It seemed that John had been honest.

上記(1)に見られるように、*that* 節内の *John* が主節の主語位置に移動しているような現象を一般に“主語繰り上げ”(Subject Raising)と呼ぶ。<sup>9</sup> これに類似する書き換え問題は実に多く、英文法問題として頻出している。主語繰り上げと *It ... that* 節の書き換えをとる例は以下に示す通り大きく3分類でき、さらに以下に例文を示す事とする。

- (3) “主語繰り上げ”と“*It ... that* 節”の書き換えを許す述語
- verbs of probability and simple fact (e.g. *seem, appear, happen*)
  - certainty adjectives (e.g. *likely, unlikely, certain, sure*)
  - impersonal passive (passive voice of verbs of saying and thinking)  
(e.g. *be found, be assumed, be supposed, ...*)<sup>10</sup>
- (4) *seem/appear/happen* :
- It seems/appears that he is dead. = He seems/appears to be dead.
  - It happened that I was there. = I happened to be there. (Declerck (1991))
- (5) *be likely/sure/certain to* :
- Jimmy is likely to succeed. = It is likely that Jimmy will succeed.
  - Jimmy was likely to succeed. = It was likely that Jimmy would succeed.
  - She is sure/certain/likely to win. = It is sure/certain/likely that she will win.  
(Declerck (1991))
- (6) *be said/thought to* :
- He is said/thought to be clever. = It is said/thought that he is clever. (Declerck (1991))

- (7) be estimated to:
- a. The rate for the North American continent has been estimated to be about 0.03 mm/year.
  - b. It has been estimated that the rate for the North American continent is about 0.03 mm/year. (Biber et al. 1999)
- (8) be supposed to :
- a. This is supposed to be a cheap restaurant. = It is supposed that this is a cheap restaurant.
  - b. This was supposed to be a cheap restaurant. = It was supposed that this was a cheap restaurant.
  - c. This is supposed to have been a cheap restaurant. = It is supposed that this was a cheap restaurant.
  - d. This was supposed to have been a cheap restaurant. = It was supposed that this had been a cheap restaurant.

次節では、このような書き換え問題の基になっている“主語繰り上げ”という統語現象を、さらに詳しく考察する事とする。なお本論では出来るだけ専門的な用語や議論を避ける事とするが、現在の言語理論研究においては、以下の6点の基本原則が広く常識的に認識されており、本論も大方これを土台としている。特に以前の格理論を念頭においている。

(9) 言語理論研究における基本原則 :

- a. the VP-Internal subject hypothesis (VP 内主語仮説) : subjects, objects, and verbs originate inside the VP (cf. Koopman and Sportiche (1991))
- b. feature checking (素性照合) : syntactic constituents do not move out of their base positions unless they have features that must be checked (Chomsky (1992)) - cf. 格理論 (Case Theory : 名詞句NPは格をもらうために移動する)
- c. the Head Movement Constraint (HMC : 主要部移動制約) : heads may not raise over heads (cf. Travis (1984), Baker (1988))
- d. the Structure Preservation Constraint (SPC : 構造保持制約) : heads may only move into head positions, and maximal projections may only move into specifier positions (cf. Emonds (1976), Cowper (1992 : 139))
- e. order of projections : sentences contain the maximal projection CP-AgrSP-TP-NegP-VP, in that order (Pollock (1989), Chomsky (1992), Cinque (1999))
- f. Spec-head agreement (指定辞・主要部一致) : heads and specifiers share features such as number, gender, person

### 3.2. コントロール動詞との相違

seem 構文の“主語繰り上げ”について考える時、コントロール動詞 (Control Verb) の統語的振る舞いと比較してみるとわかりやすい。まず代表的なコントロール動詞である want と繰り上

げ動詞 seem の主語の持つ特質の相違を考察してみる。<sup>11</sup>

(10) 「5 文型」 的 分類の 限界： 同 じ「第 3 文 型」 の 文 で も 派 生 が 異 なる

- a. John wants to be honest. (コントロール動詞)
- b. John seems to be honest. (繰り上げ動詞)

コントロール動詞 ((10a) 参照。類例については以下の (11) 参照) を含む文においては、その主語位置に入る要素は、その動詞の意味によって規定・限定されてくる。たとえば want の場合は、その動詞固有の本来の意味からして主語位置には通例人間が入る事を要求するので、(10a) の場合は John という人名を示す固有名詞が入っている。つまりおとぎ話や比喩的な用法でもない限り、動詞 want の主語は「欲求・意志・希望を持っている人間」ということになるであろう。

(11) コントロール動詞の例：類例となる動詞の数は多い

- a. The doctor tried to save the patient's life.
- b. I can manage to solve the difficult problem.
- c. The baseball player refused to accept the generous offer.
- d. The child pretended to be sick in the bed.
- e. I did not mean (intend) to hurt your feelings at all.
- f. The president afforded to buy many mansions in the famous resort area.

この事は次に示すように want や try の主語を、物や虚字の it にしてみるとよくわかる。

(12) 通例では意味的に成立不能な文例

- a. \*The fox wanted to be arrested. (有性名詞 (動物))
- b. \*The street wants to learn English. (無性名詞)
- c. \*There tried to be two cats under the table. (虚辞の there)
- d. \*It wanted to snow heavily. (天候を表す it)

またコントロール動詞は、seem 構文と異なり、“It ... that節” への書き換えは不可能である。

(13) コントロール動詞：“It ... that節” への書き換え不可

- a. \*It wants that John is rich.
- b. \*It tried that the doctor saved the patient's life.
- c. \*It pretended that the child was sick.
- d. \*It afforded that the president bought many mansions.

以上の考察から判断すると、下に示すように、不定詞の (意味上の) 主語位置には PRO という目に見えない空範疇が入っており、これが want の主語と同じになる、つまりコントロールされていると考えられる。

(14) 不定詞の (意味上の) 主語は ? : want の主語と to be rich 主語が同じ

John wants [PRO to be rich]. (コントロール動詞)<sup>12</sup>

次に(10b)の例に目を転じると、ここでは主語位置には John が一応入っているが、主語 John が意志意図をもって何か——この場合は「...のように見える・思える」という行為——を行っているのではない。少なくとも「...のように見える・思える」と判断しているのは「私」なり「自分」なのであるから、John というのは John seems to be rich. という文の「真の主語」つまり動作主 (agent) とは言えないのではないかという事になる。

またさらに言えば、(15) に示すように、通例文においては、動作の主体である「私」なり「自分」が主語位置に入って来るものであるが、まるでこれを押しよけるかのように John が入っている。この事からして、seem の主語 John は元々この位置にあったのではなく、どこかから移動してきたのではないかと考えられる。つまり (10b) の主語 John は、補文内の主語から“繰り上げ”という移動操作を受けて派生的に生じたものである。

(15) seem 構文の意味：think/estimate の意味に近い

- a. John seems to be honest. (繰り上げ動詞)
- b. I think/estimate that John is honest.

以上の考察から、seem の主語は、want の主語と異なり、本来は seem の主語ではなく、seem の補文内の述部 (be honest) の主語でありさえすればどんなものでも構わない。多少比喩的な言い方をすれば、下記の seem 構文の例文においては、seem という動詞をまたぐように主語・述語の関係が成立していると言えよう。

(16) seem の主語位置には様々な種類の単語が来る

- a. David seems to have written the book. (有性名詞 (人間))
- b. Nobody seemed to like to attend the conference. (有性名詞 (人間))
- c. The race horse seems to be upset. (有性名詞 (動物))
- d. The valley seemed to be especially deep. (無性名詞)
- e. Bureaucracy seems to be corrupt in many countries. (抽象名詞)
- f. There seems to be a riot. (虚辞の there)
- g. It seems to be snowing heavily outside. (天候を表す it)

以上の事から seem 構文派生の仕組みを考察すると以下のようなになる。

(17) seem 構文の主語正体：seem の主語ではなく、実はその補文の主語

- a. There seems [ \_\_\_\_\_ to be a riot].  
↑
- b. It seems [ \_\_\_\_\_ to be snowing outside].  
↑
- c. Nobody seemed [ \_\_\_\_\_ to like to attend the conference].  
↑

## 3.3. 実際の派生のステップの説明

前節までの考察に基づいて、“主語繰り上げ”構文の派生のステップはどう説明すべきか考えてみる。“主語繰り上げ”という言語現象を頭に描くと、この方向での書き換えの手順を説明する方がわかり易いと思われる。補文の主語が主文の主語位置へ移動する事を念頭において、例文(2)における方向の派生の仕方を考えると、以下に示す通りである。

## (18) “it ... that節”の文からの書き換え：派生のステップ

It seems that John is honest. → John seems to be honest.

- a. It seems that John is honest. から考える。
- b. it は特に意味のない要素：seem は主語に対する要求がない事については前節までで考察した通りである。従ってこの it は指示する対象がなく、ダミー的要素<sup>13</sup>として主語位置を穴埋めするためのものである。つまりこの it は、形式を整えるため後から挿入されたものに過ぎないので、「元に戻す」という意味で、とりあえず消し去ってみる。
- c. \_\_\_\_\_ seems that John is honest. の形になる。
- d. seem は to 不定詞節を従えるので、従属節を不定詞節に変える。従って is は原形の be に変わる。またさらに、that は定形節を示すマーカーであるので、不定詞節になると that も消え去る。
- e. \_\_\_\_\_ seems [John to be honest] の形になる。
- f. 不定詞節内では John には格が付与されないなので、屈折から主格を受けるべく John は主文の主語位置へ移動する。<sup>14</sup>
- g. John seems [ ... to be honest] の形が最終的に導かれた。

次に逆方向の書き換えを考察してみる。

## (19) “主語繰り上げ”の文からの書き換え：派生のステップ

John seems to be honest. → It seems that John is honest.

- a. John seems to be honest. から考える。
- b. John seems to be honest. の主語 John は繰り上げという操作を受けて主文の主語位置に入ったので、補文の主語位置に戻す。
- c. \_\_\_\_\_ seems [John to be honest]. の形になる。
- d. [John to be honest] と補文内に主語がある以上不定詞のままでは不可である。なぜなら \*for John to be honest の形は seem の後には許されないからである。それ故、主語 John に主格を付与する必要から seem の補文は定形節である that 節に変わらなければならない。従って、
- e. \_\_\_\_\_ seems [that John is honest] の形になる。
- f. 主語位置を空白のまま残す事はできないので、その穴を埋めるためダミー的要素 it を入れて、
- g. It seems that John is honest. の形が最終的に導かれた。

### 3.4 教室でのハンドアウト

以下の問題例は、論者が授業で配布したハンドアウトの一部である。一つの例文を種々の指示に従って書き換える事によって、受講学生の基本的文法事項の理解力が見られるように意図されている。ここでは本論のテーマである“主語繰り上げ”に関する問題を抜粋してみた。前節までの考察を踏まえて以下の問題を考えると、実に明瞭に seem に関する書き換え問題や英作文問題が理解できる事に気づくはずである。

#### (20) 問題例：

John kicks the ball. の基本文を以下の指示に従って書き換えなさい。

- a. Johnはそのボールを蹴ったようだ(ように見える)。(seemを使って)

[答：John seems to have kicked the ball.]

- b. Johnはそのボールを蹴ったと思われている。(be believedを使って)

[答：John is believed to have kicked the ball.]

- c. Johnはそのボールを蹴りそうだ。(be likelyを使って)

[答：John is likely to kick the ball.]

- d. Johnはそのボールを蹴りそうに見える。(seem, be likely toを使って)

[答：John seems to be likely to kick the ball.]

## 4. 結 語

学校英文法の重点事項の一つになっている seem に関する書き換え問題に見られる統語現象は、生成文法理論では「常識」となっている“主語繰り上げ”と呼ばれる移動現象であることを指摘した。さらに want などのコントロール動詞との対比を通して seem 構文の主語の顕著な特質を考察した。こういった観点から動詞 seem を考えてみると、極めて理路整然と seem に関する書き換え問題が考えられるようになり、言語現象がより明瞭に浮かび上がって来るのが理解できる。理論言語学、特に生成文法の成果が学校英文法へ還元される所以である。

### 注

- 1 例えば論者が1997年から1998年にかけて過ごしたハーバード大学では、学生食堂内の人の行き交う場所に常時電源の入っている端末が数台設置されていて、立った状態ではあったが、ハンバーガーをかじりながらでも電子メールのチェックをすることができた。
- 2 例えば語順について言えば、日本語は典型的なSOV語順で、英語はSVO語順である。
- 3 原理・媒介変数理論 (Theory of Principles and Parameters) と呼ばれ、チョムスキー自身はこちらの名称を好むが、1981年のチョムスキーの著作名に因んで広く一般に G (overnment) B (inding) 理論と呼ばれている。
- 4 当時の訳書の邦題は『文法の構造』というもので、いささか誤解を招きやすい邦訳名であった。
- 5 標準理論 (Standard Theory)、拡大標準理論 (Extended Standard Theory)、修正拡大理論 (Revised Extended Standard Theory)、GB 理論 (GB Theory、または Theory of Principles and

Parameters)、ミニマリストプログラム／極小主義 (Minimalist Program)

- 6 チョムスキーはしばしば比喩的に火星人の話をする。火星人が地球に降りて来て地球人の話している言葉を聞けば、たとえそれが英語であろうとフランス語であろうと中国語であろうと、どれも同じように聞こえるのではないか、というものである。これは普遍文法の本質についての実にわかりやすいたとえであろう。事際、研究成果がある程度蓄積され始めた1970年代以降、生成文法研究の重点は普遍文法の解明に明確に移行して行った。ここに安井稔博士のまことに的確で洞察力に富んだ表現を引用しよう。「英語の分析は、チョムスキーという龍が空中高く舞い上がるために必要な滑走路であったすぎない。一度舞い上がってしまえば、あまり用はない。栄養補給に時おり立ちもどるという程度であろう。」(『生成文法の三十年』『月刊言語』1986年12月号) 因に付言すると、チョムスキーは1928年、元号で言うと昭和3年の龍年生まれである。
- 7 Chomsky (1992) 参照。なおこのプログラムという言葉は日本語に訳しづらいため、「ミニマリスト・モデル」とか「ミニマリスト・アプローチ」と呼称される事が多い。さしあつたては研究手法・接近法 (アプローチ) と理解してよいであろう。
- 8 教室での説明の際には、この書き換えのどちら側から板書し解説するかが最初のポイントとなる。また英作文でよく見受けられる誤りとしては \*John seems that he is honest. や \*It seems John to be honest. といったように、It seems that John is honest. = John seems to be honest. の書き換えをまぜこぜにしてしまう学生の間違えもかなり多い。
- 9 “繰り上げ (Raising)” という用語は、広義には上昇移動一般を指すが、狭義には補文の主語位置から主文の主語位置への移動、すなわち subject-to-subject raising を指し、例えば動詞 seem の補文の主語が主文の主語へと上昇する事を指す。また Ek and Robot (1984) では補文が分離しているという観点から「不連続主語 (discontinuous subject)」と呼んでいる。また Leech and Svartvik (1994) では「上昇 (promote)」という用語を用いている。
- 10 「信じる」、「思う」、「言う」、「報告する」といったこれらの動詞は、能動態でも用いられるが受動態で用いるのが普通 (Palmer 1988 参照。またこのような受動態を非人称受動文 (impersonal passive) と呼ぶ) であるし、中には下記に示すように受動態でしか用いられないものがある。(Postal 1974 参照)
- (i) a. Jimi Hendrix is said to be the best guitar player that ever lived.  
b. \*Experts say Jimi Hendrix to be the best guitar player that ever lived.
- (ii) a. Max is thought to be in Paris.  
b. \*We think Max to be in Paris
- また本文の例文から明らかのように、これらの動詞は受動態で用いられた時のみ“主語繰り上げ”を許す。
- 11 seem に関して、教室で学生の初歩的な誤りとしては、seem と see の混同して seem を「見る」とつい訳してしまう学生が時々見受けられるが、seem の繰り上げ動詞としての統語的特質を理解していれば、このような間違いは起こり得ないであろう。
- 12 生成文法においては、want の補文の主語には PRO という空範疇 (John wants [ PRO to be rich ].) が、そして seem の補文の主語には移動の痕跡「t(race)」という空範疇 (John seems [ t to be rich ].) が存在するとされている。
- 13 position-filler, slot-filler, space-filler という名称でも呼ばれる事がある。
- 14 生成理論上は本文の記述通りかと思うが、教育的観点から平易に説明しようとするれば
- (iii) John seems [that ..... is honest].
- と先に主文の主語位置に動かしてしまっていて、[that ..... is honest] は不完全文であるから補文標識つまりマーカーが to に変わると考えてもいいのではないか。つまり補文化子 (complementizer) の that というのは、その後ろに「完全文」が続くのだというマーカーであり、その主語が欠落してしまった以上それは当然「不完全文」なのであり、これのマーカーとしては英語では必然的に不定詞の to か動名詞／分詞の ing となる。

## 参考文献

- Alexander, Louis G. 1988. *Longman English grammar*, London : Longman.
- Baker, Mark C. 1988. *Incorporation : A theory of grammatical function changing*, Chicago : University of Chicago Press.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan. 1999. *Longman grammar of spoken and written English*, London : Logman.
- Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic structures*. The Hague : Mouton.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on government and binding*. Dordrecht : Foris.
- Chomsky, Noam. 1986a. *Knowledge of language*. New York : Praeger.
- Chomsky, Noam. 1986b. *Barriers*. Cambridge, Mass : MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1992. A minimalist program for linguistic theory. *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1, Department of Linguistics, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Cinque, Guglielmo. 1998. Class Lectures at Harvard University.
- Cinque, Guglielmo. 1999. *Adverbs and functional heads : A cross-linguistic perspective*. Oxford : Oxford University Press.
- Cowper, Elizabeth A. 1992. *A concise introduction to syntactic theory : The government-binding approach*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Dixon, R.M.W. 1991. *A new approach to English grammar, on semantic principles*. Oxford : Clarendon Press.
- Declerck, Renaat. 1991. *A comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo : Kaitakusha.
- Ek, van Jan A. and Nico J. Robot. 1984. *The student's grammar of the English*, Oxford : Basil Blackwell.
- Emonds, Joseph E. 1976. *A transformational approach to English syntax : Root, structure preserving and local transformations*. New York : Academic Press.
- Fukui, Naoki, and Margaret Jean Speas. 1986. Specifiers and projection. *MIT Working Papers in Linguistics* 8:128-172.
- Grimshaw, Jane. 1990. *Argument structure*. Cambridge, Mass : MIT Press.
- Kayne, Richard S. 1994. *The antisymmetry of syntax*, Cambridge, Mass : MIT Press.
- Koopman, Hilda, and Dominique Sportiche. 1991. The Position of Subjects. *Lingua* 85 : 211-258.
- Leech, Geoffrey, and Jan Svartvik. 1994. *A communicative grammar of English*, 2nd ed. London : Longman.
- Pollock, Jean-Yves. 1989. Verb movement, Universal Grammar, and the structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20:365-424.
- Palmer, Frank Robert. 1988. *The English verb*. 2nd ed. London : Longman.
- Postal, Paul M. 1974. *On raising : One rule of English and its theoretical implications*. Cambridge, Mass : MIT Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London : Longman.
- Swan, Michael. 1995. *Practical English usage*, 2nd ed. Oxford : Oxford University Press.
- Travis, Lisa. 1984. *Parameters and effects of word order variation*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Wierzbicka, Anna. 1988. *The semantics of grammar*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.

平成11年(1999)年10月1日受理

平成11年(1999)年12月27日発行